中高年女性の配偶者に対する感情と性に関する評価

安田かづ子・細江容子

要 約

中高年女性の性の問題は、更年期に特有のものと理解されることが多い。しかし、性のあり方は結婚生活とも密接に関連しており、性の問題は、パートナーとの関係性の中でも捉えられる必要がある。本研究では、①配偶者に対する感情と性の満足の評価との関係、②更年期と性の満足の評価との関係を明らかにすることを目的とした。

性の満足には、これまでの性の快感の程度が大きく影響をしていることが明らかとなったことから、これまでの性の関係の累積性が性の評価に関わると言える。また、更年期の影響は、情緒的要因の嫌でも応じた性の有無にみられたことから、中高年期は夫と妻の性の欲求の差が更年期に大きく感じられると推測される。

キーワード: 中高年女性、結婚の満足、性の満足

2004, 家族社会学研究, 16(1): 52-60

The Examination of the Middle-Aged and Elderly Women's Feelings toward and Sexual Lives with Thier Spouse

Kazuko Yasuda, Yoko Hosoe

Abstract

The problems related to the middle-aged and elderly women's sexual lives are often considered to be unique to the menopausal women. However, due to the close relationships between the ways of their sexual lives and the marriage lives, it is necessary to address issues in relation to their partners. This study aimed at examining (1) the relationship between the feelings towards their partners and the satisfaction of their sexual lives; (2) the relationship between the menopause and the satisfaction of their sexual lives.

The findings showed that the satisfaction of the sexual life is substantially influenced by the degree of the pleasure from the sexual life up to now, so it can be said that the accumulation of the sexual relationships is related to the assessment of sexual life. Moreover, the emotional factor for the menopause affects whether the sexual life is desired, thereof, it can be concluded that the difference between the middle-aged and elderly husbands and wives, sexual desire is particularly great in the menopause.

Key words: middle-aged and elderly women, satisfaction from marriage, satisfaction from sex

2004, Japanese Journal of Family Sociology, 16(1): 52-60

I. はじめに

中高年期は男女とも 40～60 歳にプラスマイナス 5 歳と考えられており(石川, 1996), この時期は更年期とかかわる時期でもある⁽¹⁾。特に女性の更年期は, 主にエストロゲンの減少といった生理的要因によって生殖器系にも問題が生じることから, 一般にこの時期の性の問題は, 更年期に特有のものと理解されることが多い(小野ほか, 2001)。しかし結婚をしている場合, 性のあり方は結婚生活のありようとも密接に関連していることが考えられ, 性の問題は, パートナーとの関係性の中でも捉えられる必要があるが, まだその研究は少ない(長津ほか, 1997)。そこで本研究では, 中高年期の性に, 現在の身体的状況や結婚の満足とともに, これまでの結婚や性の経緯がどのように関わるかを分析することを目的とした。

II. 中高年女性の結婚・性の特徴

中高年期は性に関しては, 性欲の減少(熊本, 1989), 膣潤滑液分泌遅延や性交痛の増加, 性の回数の減少(野末ほか, 2000)などがみられ, また, 結婚に関してはこの時期は結婚に関する幸福度(牛島, 1978), 満足(博報堂生活総合研究所調査年報, 1998), 愛情(菅原ほか, 1997)が結婚当

初に比較して低下する。

III. 研究枠組み

本研究では身体的要因⁽²⁾(更年期指数, 性の回数, 性交痛)や情緒的要因(日常と性におけるコミュニケーション, 信頼性, 親密性, 嫌でも応じた性), 結婚の満足に関する評価(結婚満足度尺度, 結婚の満足指数)が性の満足に関する評価(性の満足指数, 性の快感の程度, 性の快適の程度⁽³⁾)にどのように関わるのかを分析することを目的とした(図 1)。性への表出的項目を従属変数として扱ったのは, 性の評価には身体的なものとともに夫との関係性のありようも関連するものであると考えるからである。

1. 用語の定義

- 1) 性: ここでは, 主に直接的性行動(セックス)を伴った行為とする。
- 2) 性の快感: 性的欲求によって性的感情が高まり, それに反応して興奮期→上昇期→オルガスム期→消退期のサイクルの中で得られる快感(野末, 2000)。
- 3) 性の快適: 快感が比較的短時間の身体的感覚であるのに対して, 直接的性行為をどのように受け止めたかの感覚。
- 4) 性交痛: 加齢によるエストロゲン減少によ

図 1 分析枠組み

る膣・外陰の萎縮、それに伴う膣潤滑液減少によって引き起こされる疼痛（大川，2001）。

2. 方法

- 1) 結婚満足度尺度：現在の結婚の満足度を測定するものとして、袖井ら（1985）により作成された（Stinnett らが老夫婦を対象に、情緒的、精神的側面に焦点を当てて作成した Marital Need Satisfaction Scale を参考に作成されたもの）結婚満足度尺度を用いた⁽⁴⁾。
- 2) 結婚・性の満足指数：結婚当初を 100 としたときの、育児期・現在の 2 時点の結婚・性の満足の程度⁽⁵⁾。
- 3) 簡略更年期指数：更年期の 10 の自覚症状について小山（1999）が作成した指数⁽⁶⁾。
- 4) 結婚における日常と性の感情：コミュニケーション、信頼性、親密性についての感情⁽⁷⁾。
- 5) 嫌でも応じた性の程度、性の快感の程度、性の快適の程度：結婚以来現在までの性を 100 としたときの程度。

IV. 研究方法

1. 調査方法

- 1) 調査票：自記式調査票⁽⁸⁾。
- 2) 調査期間：2002 年 3 月～8 月
- 3) 調査対象者：N 県在住の 40～59 歳の有配偶者女性。
- 4) 配布・回収方法：配票郵送法。
- 5) 調査内容：先行研究を参考にして、以下の内容から構成した。
①属性 ②コミュニケーション ③夫の信頼感 ④結婚満足度尺度 ⑤結婚の満足感 ⑥夫との親密感 ⑦結婚・性の満足指数 ⑧性の快適・快感の程度 ⑨嫌でも応じた性 ⑩性の回数 ⑪更年期指数 ⑫性の問題に関する自由記載
- 6) 配布数・回収数：配布数 888 通、回収数 498 通、回収率 56.1%，有効回答票 494 通、有効回答率 99.2%。

7) 分析対象：回収されたもののうち、特に中高年期を前述の石川の定義に基づくとともに、閉経周辺期の年齢を考慮して、更年期に入る前段階の 40～44 歳 ($N=48$)、閉経前の 5 年間で更年期の前半に当たる 45～49 歳 ($N=79$)、閉経後の 5 年間で更年期後半に当たる 50～54 歳 ($N=88$)、更年期終了後の 55～59 歳 ($N=47$) の 4 群に分けて分析を試みた。

8) 統計：集計、分析には統計ソフト STATISTICA を用い、比率の差の検定は χ^2 検定を、平均値の差の検定には一元配置の分散分析を行った、グループ間に差が認められた場合 χ^2 検定では残差分析を、一元配置の分散分析では、LSD (Least Significant Difference test) 法による多重比較を行った。重回帰分析はピアソンの相関係数で、相関が認められたもの ($r=0.2$ 以上) について行った。有意水準は 5% とした。

V. 結 果

1. 基本的属性

全グループ ($N=262$) の平均年齢は、妻 49.6 歳 ($SD 5.1$) で、40～44 歳 ($N=48$) 42.1 歳 ($SD 1.4$)、45～49 歳 ($N=79$) 46.9 歳 ($SD 1.4$)、50～54 歳 ($N=88$) 52.1 歳 ($SD 1.5$)、55～59 歳 ($N=47$) 57.0 歳 ($SD 1.4$)、夫の全グループの平均年齢は 52.6 歳 ($SD 6.3$) で、妻と夫の年齢の差は平均 3.0 歳であった。結婚年数の平均は 25.3 年 ($SD 6.2$) で、40～44 歳 ($N=48$) 16.9 年 ($SD 3.2$)、45～49 歳 ($N=79$) 22.8 年 ($SD 3.39$)、50～54 歳 ($N=88$) 28.0 年 ($SD 3.0$)、55～59 歳 ($N=47$) 33.2 年 ($SD 2.9$) であった。子供の数 は平均 2.4 人 ($SD 0.7$) であった。（なお、集計は無回答を除いて行った。以下同じ。）

2. 全体的傾向

1) 各項目（性の回数、結婚の満足指数、性の満足指数、嫌でも応じた性の有無、結婚満足度尺度、性の快感の程度、性の快適の程度、更年期指数、性交痛の有無、性のコミュニケーションの有無、

性の信頼性の有無, 性の親密性の有無)について, 各年齢層別に比較した。

a) 性の回数の, 全グループの平均は2.5 (*SD* 2.6) 回/月で, 年齢層間に統計的に有意な差があり, 55～59歳が他の年齢層よりも有意に少なかった(表1)。

b) 結婚の満足指数・育児期の全グループの平均は89.4 (*SD* 37.5), 結婚の満足指数・現在の全グループの平均は96.2 (*SD* 47.7) で, 年齢層間に統計的に有意な差はなかった(表1)。各年齢層別に結婚の満足指数の育児期と現在とを比較すると, いずれの年齢も育児期よりも現在の方が高く, その差の平均は6.8ポイントであった。

c) 性の満足指数・育児期の全グループの平均は, 84.8 (*SD* 32.7) で, 年齢層間に統計的に有意な差は見られなかった。性の満足指数・現在の全グループの平均は69.1 (*SD* 42.9) で, 年齢層間に統計的に有意な差がみられた ($F=5.78, p<.01$)。多重比較の結果, 40～44歳>45～49歳, 40～44歳>50～54歳, 40～44歳>55～59歳, 45～49歳>55～59歳であった(表1)。

各年齢層別に性の満足指数の育児期と現在とを比較すると, 40～44歳は育児期よりも8.9ポイント高くなっているが, 45～49歳, 50～54歳, 55～59歳は, いずれも育児期よりも現在の方が低く, その差の平均は22.9ポイントであった。

結婚の満足指数を, 新婚期→育児期→現在の変化からみると, 各年齢層とも育児期は新婚期よりも低下するが, 現在は育児期よりも高くなる。また性の満足指数は, 各年齢層とも育児期は新婚期よりも低下するが, その後現在は40～44歳は育児期よりも高くなり, 45～49歳以上は, 育児期よりも更に低下する(図2)。

d) 嫌でも応じた性の有無では, 嫌でも応じた性が「あり」とする人は, 全グループでは216名(83.7%)で, 年齢層間の差は有意であった($\chi^2(3)=12.14, p<.01$)。残差分析の結果, 嫌でも応じた性が「あり」に関しては50～54歳が有意に多く, 「なし」に関しては40～44歳が有意に多

かった(表1)。性に嫌でも応じる理由(複数回答)で半数を超えるものは, 「夫が不機嫌になるから」118名(55.2%), 「夫が可愛そうだから」が113名(52.0%), であった。嫌でも応じることについて, 自由記載では「どちらかという, 断るべきでないと我慢して受け入れていた」(50歳代), 「嫌だと思っても, 夫が積極的で, その気にさせられてしまうため」(40歳代), 「嫌だと思っても, 応じると楽しくなるから」(50歳代), 「セックスは自分勝手に今ひとつだが, 普段はとっても優しくて, 思いやりのあるなんでも話せる信頼できる人, 私のことを心配してくれているから」(50歳代)などであった。

e) 結婚満足度尺度, 性の快感の程度, 性の快適の程度, 更年期指数, 性交痛の有無については, 年齢層間に統計的に有意な差は認められなかった(表1)。

f) 性のコミュニケーションがあるとする人は, 全グループでは75名(28.8%)で, 年齢層別では40～44歳12名(25.5%), 45～49歳25名(32.1%), 50～54歳26名(29.5%), 55～59歳12名(25.5%)であり, 年齢層間に統計的に有意な差は認められなかった。

性の信頼性があるとする人は, 全グループでは219名(84.9%)で, 年齢層別では40～44歳38名(80.9%), 45～49歳68名(89.5%), 50～54歳74名(84.1%), 55～59歳39名(83.0%)であり, 年齢層間に統計的に有意な差は認められなかった。

性の親密性がありとする人は, 全グループでは197名(76.4%)で, 年齢層別では40～44歳36名(76.6%), 45～49歳59名(75.6%), 50～54歳66名(76.7%), 55～59歳36名(76.6%)であり, 年齢層間に統計的に有意な差は認められなかった。

なお, 日常のコミュニケーション・信頼性・親密性との関連をみると, 日常生活で夫とコミュニケーションが「あり」194名(77.0%)のうち, 性に関わるコミュニケーションが「あり」65名

表 1 年齢層別性の回数、結婚の満足指数、性の満足指数、嫌でも応じた性の有無、結婚満足度尺度、性の快感の程度、性の快適の程度、更年期指数

年 齢		40～44 歳 (N=46)	45～49 歳 (N=79)	50～54 歳 (N=86)	55～59 歳 (N=47)	全グループ (N=258)	検定
項 目							
性の回数* 回/月		2.6 (±2.5)	3.0 (±3.1)	2.5 (±2.3)	1.3 (±1.3)	2.5 (±2.6)	$F=4.61$ $p<.01$
結婚の満足指数	育児期	95.7 (±39.4)	90.8 (±43.8)	88.4 (±30.0)	82.2 (±36.3)	89.4 (±37.5)	有意差なし
	現在	101.6 (±47.9)	92.8 (±47.8)	102.0 (±49.2)	86.0 (±43.4)	96.2 (±47.7)	有意差なし
性の満足指数	育児期	80.2 (±32.5)	83.7 (±33.0)	87.0 (±30.2)	86.9 (±37.6)	84.8 (±32.7)	有意差なし
	現在**	89.1 (±47.9)	71.6 (±45.8)	65.0 (±34.6)	52.3 (±40.6)	69.1 (±42.9)	$F=5.78$, $p<.01$
嫌でも応じた性の有無***	なし(名)	▲15 (31.9)	13 (16.9)	▽8 (9.1)	6 (13.0%)	42 (16.3)	$\chi^2(3)=12.1$, $p<.01$
	あり(名)	▽32 (68.1)	64 (83.1)	▲80 (90.9)	40 (87.0)	216 (83.7)	
結婚満足度尺度		17.0 (±6.3)	16.2 (±5.8)	18.1 (±5.5)	16.2 (±5.3)	17.0 (±5.7)	有意差なし
性の快感の程度		50.4 (±28.0)	50.2 (±28.9)	55.6 (±26.7)	49.9 (±24.4)	51.5 (±27.2)	有意差なし
性の快適の程度		54.7 (±7.9)	56.3 (±26.2)	60.5 (±24.5)	53.2 (±21.4)	56.2 (±25.3)	有意差なし
更年期指数		24.8 (±16.5)	27.9 (±18.1)	32.0 (±18.1)	32.2 (±20.9)	29.5 (±18.5)	有意差なし

*多重比較結果：40～44 歳>55～59 歳，45～49 歳>55～59 歳，50～54 歳>55～59 歳

**多重比較結果：40～44 歳>45～49 歳，40～44 歳>50～54 歳，40～44 歳>55～59 歳，45～49 歳>55～59 歳

***残差分析結果：▲有意に多い ▽有意に少ない

図 2 結婚の満足・性の満足(育児期・現在) 指数
(*現在の時点は各年齢層によって異なる)

(33.5%), 日常生活で親密性が「あり」104名(40.3%)のうち, 性に関わる親密性が「あり」94名(90.4%), 日常生活で信頼性が「あり」220名(85.3%)のうち, 性に関わる信頼性が「あり」193名(74.8%)であった。

3. 各項目の更年期指数の異常の有無別比較

更年期指数の異常の有無の2群別に妻の年齢, 結婚満足度尺度, 結婚の満足指数・現在, 性の満足指数・現在, 性の回数, 性の快感の程度, 性の快適の程度, 嫌でも応じた性の有無, 性交痛の有無, 性のコミュニケーション・性の信頼性・性の親密性の有無の程度を比較した。

更年期指数の異常の有無の2群間で有意な差がみられたのは, 妻の年齢(異常なし群: 48.9, 異常あり群: 50.4, $F=5.66, p<.05$), 結婚満足度尺度(異常なし群: 17.9, 異常あり群: 17.0, $F=6.01, p<.05$), 結婚の満足指数・現在(異常なし群: 104.2, 異常あり群: 88.7, $F=6.82, p<.01$), 性の満足指数・現在(異常なし群: 77.2, 異常あり群: 61.6, $F=8.20, p<.01$), 嫌でも応じた性の有無(異常なし群: 嫌な性あり 78.7%, 異常あり群: 嫌な性あり 88.5%, $\chi^2=4.55, p<.05$)であった。性の回数, 性の快感の程度, 性の快適の程度, 性交痛の有無, 性のコミュニケーション・性の信頼性・性の親密性の有無については, 2群間に統計的な差はみられなかった。

4. 各項目の2群別による性の満足指数・現在の比較

性交痛, 嫌でも応じた性, 性のコミュニケーション, 性の信頼性, 性の親密性の項目(「あり」・「なし」), 更年期指数, 性の回数, 結婚満足度尺度, 結婚の満足指数・現在, 性の快感の程度, 性の快適の程度の項目(平均値より「高値群」・平均値より「低値群」)の2群別に性の満足指数・現在を比較した。

性の満足指数・現在に有意な差がみられたのは, 性交痛の有無(あり: 61.6, なし: 76.7, $F=5.23, p<.05$), 性の回数(高値群: 81.5, 低値群: 59.6, $F=15.77, p<.01$), 性に関するコミュニ

ケーションの有無(あり: 92.9, なし: 59.6, $F=33.33, p<.01$), 性の信頼性の有無(あり: 71.6, なし: 55.9, $F=4.44, p<.05$), 性の親密性の有無(あり: 78.3, なし: 42.8, $F=34.8, p<.01$), 結婚満足度尺度(高値群: 82.4, 低値群: 47.8, $F=42.45, p<.01$), 結婚の満足指数・現在(高値群: 85.4, 低値群: 55.4, $F=33.19, p<.01$), 性の快感の程度(高値群: 89.8, 低値群: 53.0, $F=49.30, p<.01$), 性の快適の程度(高値群: 89.5, 低値群: 50.5, $F=55.97, p<.01$)であった。いずれも性交痛-なし群, 性の回数-高値群, 性に関するコミュニケーション-あり群, 性の信頼性-あり群, 性の親密性-あり群, 結婚満足度尺度-高値群, 結婚の満足指数・現在-高値群, 性の快感の程度-高値群, 性の快適の程度-高値群が有意に性の満足指数が高かった。嫌でも応じた性の有無による差はみられなかった。

5. 各項目と性の満足指数・現在との関連

性の満足指数・現在と各項目についての相関を見た(質的データについては, あり=1, なし=0の2値に変換して相関を求めた)。有意な相関が認められたのは, 更年期指数($r=-.208$), 性の回数($r=.337$), 性のコミュニケーションの有無($r=.361$), 性の親密性の有無($r=.415$), 結婚満足度尺度($r=.363$), 結婚の満足指数・現在($r=.497$), 性の快感の程度($r=.551$), 性の快適の程度($r=.525$)の8項目であった。

性の満足指数・現在を目的変数とし, この有意な相関が認められた8項目を予測変数として重回帰分析を行った($N=213$)。その結果, 性の満足指数・現在に関連をするのは4変数で, 最も影響が強いのが性の快感の程度($\beta=0.320, p<.01$)で, 次いで結婚の満足指数・現在($\beta=.268, p<.01$), 性の親密性の有無($\beta=.145, p<.05$), 更年期指数($\beta=-.116, p<.05$)で, 説明率は41.8%であった($F(8, 205)=20.08, p<.01, R^2=.417$)。

VI. 考 察

1. 各項目と更年期との関連

1) 更年期に当たる45～49歳、50～54歳の年齢層が、更年期の前後の40～44歳、55～59歳の年齢層と比較して、増加または減少しているのは、性の回数（45～49歳が多い）、性交痛の有無（50～54歳が少ない）、嫌でも応じた性の有無（50～54歳が多い）、性のコミュニケーション（45～49歳が多い）、性の信頼性（45～49歳が多い）、性の快適の程度（50～54歳が多い）の6項目であった。ただし、性の回数、性交痛の有無、性のコミュニケーションの有無、性の信頼性の有無の5項目については更年期に当たる年齢層で、性の回数が多い、性交痛が少ない、性のコミュニケーションや性の信頼性が高いなど更年期による問題が生じているとはいえない。そのため更年期による影響は身体的要因にはみられず、情緒的要因の嫌でも応じた性の有無のみにみられるといえる。

2) 結婚の満足指数を育児期→現在と結婚の経過でみると、現在の結婚の満足は育児期より高くなるといえる。しかし、性の満足指数は、40～44歳は育児期よりも現在が高くなるが、45～49歳以降は育児期、現在と結婚の経過に伴って低下していく。このことから更年期の前半に当たる40歳代後半に、性の満足の変化が生じていくといえる。

3) 更年期指数の異常の有無別に各項目を比較すると、更年期指数の異常のない群は年齢的に若く、現在の結婚についての満足、性についての満足が高いことから更年期の症状が年齢や結婚と性の満足感を規定する要因の一つとなっているといえる。しかし性の回数と性交痛の有無に2群間に統計的には差がないことから、現在の性の身体的状況に更年期の症状が関与しているとはいえない。また、性のコミュニケーションの有無、性の信頼性の有無、性の親密性の有無に関しても2群間に統計的に差がみられなかったことから、性に

関する情緒的側面にも更年期の症状が関与するとはいえない。このことから更年期の症状が性の関係に問題を生じさせるとはいえない。

2. 各項目と性の満足

各項目の2群別による比較では嫌でも応じた性の有無は、性の満足指数・現在に差がみられなかったことから、嫌でも性に応じることが必ずしも性に対する否定的な感情を引き起こしているとはいえず、そのことは自由記載の内容からいえる。

3. 性の満足に関連するもの

性の満足指数・現在に関連するものとして、性の快感の程度が大きく、次いで結婚の満足・現在、性の親密性の有無、更年期症状であったことから、現在の性の満足には、結婚以来の性における経緯が大きく影響するといえる。

VII. 結 論

1. 更年期は身体的問題が現れることが予測されたが、更年期指数、性交痛、性の回数の身体的要因については、更年期に特徴的な問題が生じていなかった。しかし、情緒的要因の嫌でも応じた性は、更年期に当たる年齢層に多く感じられていることから、妻にとって、夫との性の欲求の差が大きく感じられる時期であるといえる。けれども、嫌でも応じた性の有無による現在の性の満足の程度に差がみられなかったことから、夫との性の欲求の認識の差がすぐに性の問題を大きくするとはいえない。

2. 更年期の症状の程度は、現在の結婚の満足や性の満足の認識に影響をするが、現在の夫との性の関係を規定するものではないといえ、更年期症状が中高年期の性の問題を引き起こしているとは必ずしもいえない。

3. 現在の結婚の満足はどの年齢層も育児期より高くなっている。それと異なり、性の満足は40歳代前半は育児期より高いが、40歳代後半からは育児期よりも低下している。このことから、更年期の前半に当たる40歳代後半は結婚の満ちに

関してのターニングポイントとはならないが、性の満足に関してのターニングポイントとなるのではないかと考えられる。

4. 現在の性の満足の認識には、これまでの性において性の快感がどの程度感じられてきたかという累積性が大きく影響しており、性の関係において性の快感という肉体的に感じ取られる満足感が重要であることが明らかとなった。

5. 嫌でも応じた性の有無は現在の性の満足に関連しないことは、夫に対する日常と性の信頼性、性の親密性が高いことが影響していると思われる。このことが、性欲が喚起されない状態での性に対する妻の許容範囲を大きくしているのではないかと推測される。また、そのため嫌でも応じた性が性の満足に影響を及ぼさない結果となっていると推測される。

今回の研究は、女性の視点から結婚における性の現状をみたものであり、調査に協力を得られた対象者は比較的夫との関係性が良い人々と推測でき、そこに本研究の限界がある。しかしこれまでこのような研究はその重要性を指摘されながらもあまり行われてこなかったもので、その意味で今回の研究は意義があると考えられる。

今後、妻の性の満足の低下が結婚における性の重要性に影響を与えるのか、また、性の重要性が変容するとすれば、妻は夫との性の関係に対して求めるものも変容をするのかについても明らかにすることが必要であると考えられる。

【注】

- (1) 日本女性の平均閉経年齢は 50 歳で、45 歳から 55 歳を更年期としている。この時期エストロゲンの分泌低下による自律神経失調症状や精神神経症状などの発現が多くなる。また、それに先立つエストロゲン分泌が低下し始め、排卵が不確実になる 40 歳からを閉経周辺期に入る年齢としている（武谷，2001）。
- (2) 身体的要因を更年期指数、性の回数、性交痛としたのは、40 歳代から卵巣機能の低下により

血管運動神経症状、精神神経症状、運動神経症状が引き起こされ、その症状の程度を客観的に捉えたのが更年期指数であり、また、生殖系への影響が性交痛、性の回数に関連していると考えられるからである（小野ほか，2001）。

- (3) 村瀬（1996）は、性が生理的な快感のみを味わいたいからだけではないことを指摘しているが、本研究では、性を肉体的快感のみではなく、夫との関係性の面から感じとられているものも捉える必要があると考え性の快適についても質問をした。
- (4) Stinnett らの尺度は愛情、人格充足、尊敬、コミュニケーション、人生の意味を見つけること、過去の人生経験の統合の 6 領域計 24 項目からなりたっているが、柚井らは日本人の高齢者に答えにくいものを除き、その他領域を限定しない 2 項目を付け加えて 13 項目の結婚満足度尺度を作成している。質問は次の 13 項目からなる。①私は夫といると安らいだ気持ちになります。②夫は私に思いやりを示してくれます。③夫は私の嫌がることをしないしてくれます。④私は夫に何でも気楽に話せます。⑤夫は私がこれまで成し遂げてきたことを認めてくれていると思います。⑥私と意見が対立するとき夫は何か妥協点を見出そうと努力してくれます。⑦夫は私に何でも気楽に話してくれます。⑧夫は私の欠点だけでなく長所も認めてくれていると思います。⑨夫は毎日の生活を意味のあるものにするよう協力してくれます。⑩私が何かをしようするとき夫はたいてい励ましてくれます。⑪夫は私が生きがいを見つけられるように助けてくれます。⑫全体的に見て私は夫に満足しています。⑬もう一度生まれ変わるとしても同じ人と結婚したいと思います。回答は「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の 3 つであり、それぞれに、2 点、1 点、0 点を与える。13 項目の回答の合計点を結婚満足度尺度得点とする。満点は 26 点である。
- (5) 結婚の満足指数、性の満足指数は、結婚当初を 100 としたときの満足の程度で、博報堂調査年報（1998）の調査の、夫婦の絆の項の「結婚当初を 100 とした際の配偶者への愛情度合い・愛情が 2 倍であれば 200、半分であれば 50」とする質問方法を参考に作成。結婚から現在までの経緯を明らかにするために、「育児期」（末子が小学校に入学するまで、または結婚 15 年目頃）と「現在」の 2 時点について質問。

- (6) 更年期の自覚症状と自覚症状の程度は、小山の簡略更年期指数を用いた。質問は、①顔がほてる、②汗をかきやすい、③腰や手足が冷えやすい、④息切れや動悸、⑤寝つきが悪い・眠り浅い、⑥怒りやすすぐイライラする、⑦くよくよしたり憂鬱になる、⑧頭痛・めまい・吐き気、⑨疲れやすい、⑩肩こり・腰痛・手足の痛みの10項目で症状の程度に応じて0～14点を配点する。合計得点の0～25点を異常なし、26点以上を異常ありとした。
- (7) 結婚生活における日常と性の状態については「コミュニケーション」、「信頼性」、「親密性」の3つの面から質問項目を設定した。「コミュニケーション」は、日常：話がはずむ、性：妻は性（セックス）の欲求を夫に伝える。「信頼性」は、日常：夫として信頼できる、性：夫婦のどちらかが疲れて性（セックス）ができないときがあっても、愛情に問題ないという考えで一致している。「親密性」は、日常：夫と腕を組んだり手を握ったりが自然にできる、性：夫は妻の性の快感を大切にする。回答の「そう思う」「ややそう思う」を「思う」群、「あまりそう思わない」「そう思わない」を「思わない」群として集計した。
- (8) 性に関する内容の質問項目は、調査の回答が極めて得にくいとされるため、ここでは調査対象者に直接依頼することを原則とした。そのため、市町村役場、保健所等の主に健康教育担当者を通じて健康教室やサークル、職場など配布する場を紹介してもらい、その場で研究者がまづ研究の趣旨を説明し、協力を得られた対象者に直接手渡して依頼する方法をとった。

【文 献】

石川 実, 1996,「中年期の発見」, 井上俊ほか編『現代社会学9 ライフコースの社会学』岩波書店, 95-118.
 小山嵩夫, 1999,「更年期障害の診断」『からだの科学』204: 52-54.

熊本悦明, 1989,「更年期における男女健康問題アンケート調査—一般市民における更年期障害症状の発生状況分析—」『大和証券ヘルス財団の助成による研究業績集』大和証券ヘルス財団, 1-15.
 長津美代子, 細江容子, 岡村清子, 1997,「夫婦関係研究のレビューと課題」, 野々山久也, 袖井孝子, 篠崎正美編著『家族社会学研究シリーズ1 いま家族に何が起きているのか』ミネルヴァ書房, 159-186.
 野末源一, 亀谷 謙, 2000,「ライフステージからみたセックス・カウンセリング6 老年期の性とカウンセリング」, 日本性科学会・日本セックスカウンセラー・セラピスト協会監修『セックス・カウンセリング入門』金原出版, 225-229.
 野末源一, 2000,「セクソロジー総論6 人間の性反応」, 日本性科学会・日本セックスカウンセラー・セラピスト協会監修『セックス・カウンセリング入門』金原出版, 30-35.
 村瀬幸浩, 1996,『NEW SEXOLOGY NOTE 性～もっとやさしく もっとたしかに～』東山書房.
 小野一郎, 尾林 聡, 麻生武志, 2001,「女性のライフステージにおける更年期・老年期の特性」, 武谷雄二総編集『新女性医学体系21 更年期・老年期医学』中山書店, 3-18.
 大川令子, 2001,「V セクシャリティ B. 診断と治療」, 武谷雄二総編集『新女性医学体系21 更年期・老年期医学』中山書店, 250-257.
 袖井孝子, 都築佳代, 1985,「定年退職後夫婦の結婚満足度」『社会老年学』(東京都老人総合研究所), 22: 63-77.
 菅原ますみ, 詫摩紀子, 1997,「夫婦間の親密性の評価—日記式夫婦尺度について」『季刊精神科診断学』8: 155-166.
 武谷雄二総編集, 2001,『新女性医学体系3 エージングと身体機能』中山書店, 101-102.
 博報堂生活総合研究所調査年報, 1998,『連立家族 日本の家族10年の変化』博報堂生活総合研究所.
 牛島義友, 1978,『児童研究叢書4 家族関係の心理』金子書房.